

福島県立ふたば未来学園高等学校

原子力災害からの復興を果たす グローバル・リーダーの育成

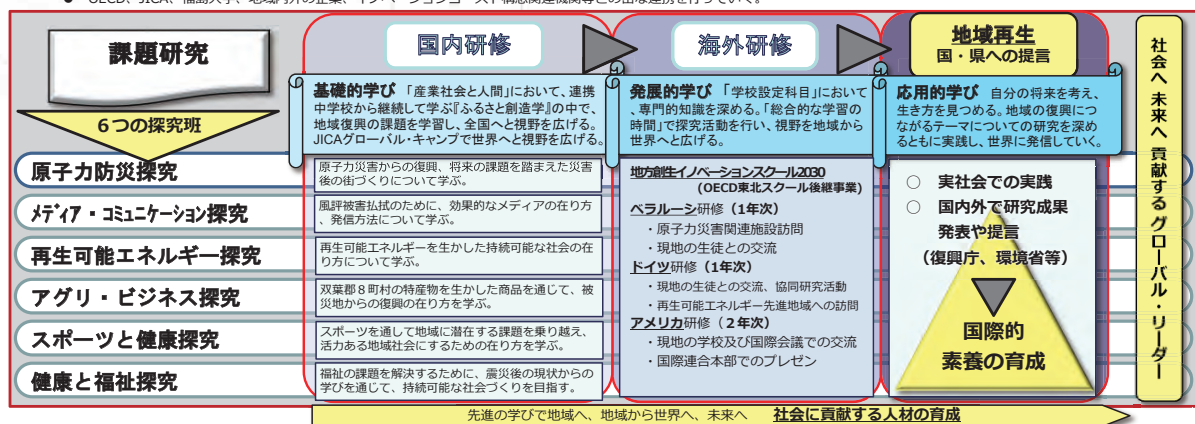
【構想の概要】

本校は平成 27 年 4 月、福島第一原子力発電所の事故による避難から帰還した福島県双葉郡広野町に開校した。双葉郡の復興は 30 ～ 40 年かかるとも言われる厳しい状況にあることを踏まえ、「解のない課題」を乗り越える力を身に付けた「変革者」の育成を目指している。「産業社会と人間（1 年次 2 単位）」「未来創造探究（総合学習 2、3 年次各 3 単位）」をカリキュラム全体の軸と位置づけ、全生徒が実社会における課題解決の実践に取り組む。また、探究の一環として代表生徒が海外研修を実施し、福島の問題とグローバルな課題を重ね合わせて思考できるリーダーとしての資質能力を育成している。

■ 構想全体像

◆ 目的：社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、福島県の復興に寄与するグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。

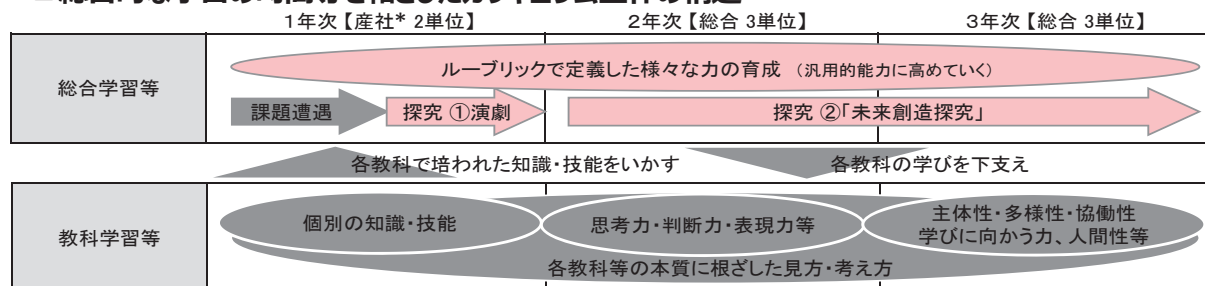
- 地域、国内から海外へと視野を広げるとともに、未来創造のために実践を通して学んでいく。
- OECD、JICA、福島大学、地域内外の企業、イノベーションコースト構想関連機関等との密な連携を行っていく。



■ 教育課程表（H30 入学生）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
1年次	国語総合				数学I			コミュニケーション英語I			体育		保健	音楽I 美術I 書道I		家庭基礎	化学基礎	現代社会	生物基礎	社会と情報	産業社会と人間		進路に応じた選択科目						LHR				
2年次	体育		保健	地学基礎 物理基礎 生物基礎		世界史A 日本史A		コミュニケーション英語II			未来創造探究		進路に応じた選択科目																				LHR
3年次	体育		未来創造探究		進路に応じた選択科目																												LHR

■ 総合的な学習の時間等を軸としたカリキュラム全体の構造



*「産業社会と人間」

ループリック起点の教育課程編成

本校では育成する資質・能力を、知識、スキル、人間性、メタ認知力という4つのカテゴリー10項目5段階に整理し、これを基盤としてカリキュラムを編成している。ループリックで定義された資質能力は、各教科の学習のみで培われる知識・技能には収まらない、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力である。実社会における横断的・総合的な問題解決に主体的に取り組み、様々な挑戦や失敗の経験も積まなければ身に付かない。そこで、カリキュラム全体で汎用的能力に高めていくための軸となる時間が必要となった。3年間の高校生活を貫いて、生徒たち自身が実社会や自身の将来と向き合いながら試行錯誤する時間である。本校では総合学習等の合計8単位をカリキュラムの軸として位置づけた。

各教科で身に付けた個別の知識や技能が、この探究で発揮されることによって、他の知識や技能と関連付けられ体系化されながら身に付き、ひいては生涯にわたり活用できるような物事の深い理解や方法の熟達に至ることを目指している。逆に、カリキュラム全体の軸となる探究があるからこそ、各教科の学習の意欲が喚起され、各教科の学習活動が確かに下支えされていく。総合学習と各教科のつながりを意図的に生み出すことで、より深い学習となる相互作用を期待している。

生徒たちの探究学習の概要

1年次では、原発事故の影響に直面している地域の様々な課題をフィールドワークで調査し、課題の構造を分析し、演劇の台本という形で整理して演じる。その際、避難先から帰還した人と今も避難を続ける人、廃炉に取り組む東京電力と地域住民等の「立場の違いによって捉え方が違い、複雑すぎて簡単には解決できない課題」等の、地域が抱える核心的な課題に子供たちが直面することを意識している。

その後、1年次に見つめた地域課題を踏まえ、2・3年次では「未来創造探究」と題した総合学習6単位で、いくつかの探究班（テーマ）に分かれて、課題解決の探究と実践に取り組む。テーマは、例え

ば原子力災害からの復興を目指す町づくりや、風評や風化対策に取り組む情報発信等である。その際、単なる研究では無く、実社会での「実践」を通して、汎用的能力を培うことを目指している。

また、この探究のプロセスと関連させた複数回の海外研修を設定している。例えば2年次においては、米国ニューヨークの国連本部を訪問し、国連本部職員や、各国の同世代と意見交換を行う。自身が取り組む地域課題解決の探究内容と、取り組みから見出した世界への提言を発信するとともに、福島の問題と世界における難民を巡るフェイクニュースなど、福島と世界の課題を重ね合わせて意見交換を行い、持続可能な世界実現の課題意識を深め、さらに探究活動を深めていく構造となっている。

探究を支える体制

本校では全教員がいずれかの年次の探究を担当する体制をとり、全校体制で指導にあたっている。未来創造探究においては、探究内容やプロセスは基本的には生徒たちの主体的な活動を重視しているが、効果的に深い学びを創造していくためのツールとして「未来創造探究ノート」を開発し、ワークシート等をそれぞれが活用できる環境を整えている。また、NPO カタリバと連携し、約7名のNPO職員や大学生インターンが常駐し、探究学習に伴走している。

成果と課題

本校においてはループリックで定義した資質・能力について半年ごとに生徒たちが自己評価を行っている。3年間を通じて生徒たちの成長が確認されているとともに、進路にも確実に結びついている。

これまでの研究開発を通じた成果として、①探究の学習効果の実証、②探究と結びついた新しいタイプの海外研修プログラム開発、③カリキュラムと教材の開発、④ループリックを起点としたカリキュラム・マネジメントの先行実施、⑤学校と社会の協働による教育体制構築が為されたことがあげられる。

一方で、探究の質の改善によるさらに深い学びの実現や、ループリックによる評価方法の改善や評価結果の活用が課題であり、引き続き取り組んでいく。